

戦後日本における『白鳥の湖』の演出と受容

木村美咲(同志社大学)

日本で『白鳥の湖』が初めて全幕上演されたのは1946年8月5日だった。帝国劇場にて25日間上演される予定が、評判の良かったため30日間に延長された。上演を志したのは島田寛という人物だった。彼は元々陸上少年だったのだが、日本大学在学時代からバレエを始め、戦時中もレッスンに励んでいた。そのため島田は、戦争中ドイツでモダンダンスに励んでいた邦昌美という創作舞踊家が『白鳥の湖』を上演したいと述べたことに憤りを感じてしまった。現代舞踊家の邦ではなく、クラシック・バレエを習ってきた自分達こそ古典バレエを上演すべきだという強い信念から、上演を決めたのだ。

島田も含め、出演したダンサーのほとんどは日本のバレエの母とも言われるエリアナ・パブロワの教え子だったが、振付担当はエリアナの門下生ではない小牧正英という人物だった。小牧はロシア人しか入学を許されていなかったハルビン音楽学校にて、特例でバレエを習い、卒業後には上海バレエ・リュスによる『白鳥の湖』に出演していた。彼はスコアから髪まですべて上海から持ち帰っており、日本での上演に際して重要な役割を果たした。

敗戦後という状況下でどのように作品が作り上げられていったのかに関しては、小野幸恵の『焼け跡の「白鳥の湖」』に詳しく記載されており、また、当時の『白鳥の湖』の評判に関しては東京新聞1946年8月19日記事「バレエの夜明け」で絶賛されている。

しかしながら、実際の上演形態に関してはまだわからないことも多い。当時の演出はゴルスキー版に基づいていたとされるが、川島京子は、実際にはゴルスキー版というよりも上海バレエ・リュスの演出に近かったのではないかと指摘している（『日本バレエ第二の誕生「東京バレエ団」とその上演作品：日本初演3作品『白鳥の湖』『シェヘラザード』『コッペリア』』）。また評判に関しても、好評だったことは事実だが、批判はなかったのだろうか。

本研究は、次の3点について考察を進める。

①1946年以前に上演された『白鳥の湖』がその演出に影響を与えた可能性はなかったのか。戦前にはオリガ・サファイアやエリアナ・パブロワによる『白鳥の湖』が上演されているためオリガの自伝『バレエ讀本』を参照しつつ、戦前の上演史を明らかにする。

②上海バレエ・リュスで上演された『白鳥の湖』

に関しては、小牧の自伝『ペトルーシュカの独白』と『バレエと私の戦後史』、さらに山川三太『『白鳥の湖』伝説：小牧正英とバレエの時代』を研究材料とする。

③上演批評については、ホテルオークラの創業者、大倉喜七郎による批評『『白鳥の湖』を観て』や、当時の記事「座談會：バレエを語る（白鳥の湖合評會）」から考察する。

以上を通して、戦後の日本がいかにしてバレエを受容し形成してきたのかを考察したい。

結論

①1946年以前、ロシア人ダンサーによって『白鳥の湖』が上演されたことがあるが、抜粋上演であり1946年時の参考になった可能性は低い。そもそも当時の日本人にとってバレエは馴染みのないものであり、観客は作品自体というよりも、目の前の技術に感動していた。また日劇ダンシングチームも1936年と1941年に抜粋上演を行なったが、「4羽の白鳥の踊り」を除けば直接的な関連性は見られない。一方で、1940年のエリアナ・パブロワによる『白鳥の湖』は1946年時の『白鳥の湖』と、ハッピー・エンドという点で共通しており、島田自身が両公演で王子役を務めていることから、関連性があったといえるだろう。

②上海バレエ・リュスは、マリンスキー劇場とディアギレフのバレエ・リュスを継いでおり、また関係者にマリンスキー劇場の出身者が多いことから、マリウス・プティパのスタイルを継承していると考えられる。実際、上海バレエ・リュスによる『白鳥の湖』はプティパ・イワノフ版であった。日本の1946年の『白鳥の湖』もゴルスキー版ではなく、実はプティパ・イワノフ版をもとにしていた可能性が高い。

③様々な芸術家・音楽家・舞踊家の間でも本作は基本的には評価が高かったが、オーケストラや振付家の小牧に対して、批判はあった。ただし、本上演は舞踊技術や、本場との比較によって評価されたのではなく、敗戦後という厳しい状況下にバレエを作り上げた日本の舞踊家たちの姿勢が人々の心を動かしたのである。

参考文献

・小野幸恵『焼け跡の「白鳥の湖」：島田寛が駆け抜けた戦後日本バレエ史』文藝春秋、2013年。
・川島京子「日本バレエ第二の誕生「東京バレエ団」とその上演作品：日本初演3作品『白鳥の湖』『シェヘラザード』『コッペリア』、『演劇映像』第56巻、2015年。